

## 寝殿造の庭園に迫る－平安時代前期・中期－

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 南 孝雄

### はじめに

平安京の上級貴族住宅は、寝殿造とよばれる住宅様式であることが知られている。この住宅の中には、池を中心とした庭園が作られるのが特徴の一つである。寝殿造は現在まで残るものは無く、絵巻物などを除くと、その姿を知ることができるのは発掘調査で確認される遺構のみとなる。今回は寝殿造の庭園がどのような姿や意匠を採用していたのか、その成り立ちを含めてみていきたい。

### 1. 庭園とは

・「庭」の文字の成り立ち:「廷」は、諸侯が朝し、君主が政治・儀式を行う広場。「广」は屋根を表し、家の意味。「廷」+「广」=「庭」は、門から建物の階段までの広場の意味。すなわち、建物の前の儀式を行うための広場が本来の意味。

・「園」の文字の成り立ち: 圃を巡らせた果樹・野菜の畑等を表す(『広漢和辞典』より)。

・庭園という言葉は、明治時代になって定着した比較的新しい言葉。それ以前は、単に庭、林泉、山水など。歴史的にみると庭園のスタイルや機能などはさまざまに変化している。

・現在、庭園とは「祭祀・儀式・饗宴・逍遥・接遇などの場として、あるいは鑑賞の対象として、一定の空間的・時間的美意識のもとに造形される野外空間」(『岩波仏教辞典』第二版)とされる。

### 2. 平安時代以前の庭園

・古墳時代の祭祀遺構: 城之越遺跡(三重県伊賀市)、阪原坂戸遺跡(奈良県奈良市)、巢山古墳の出島状遺構(奈良県広陵町)。これらはいずれも水辺の祭祀場で石敷きを伴う。

・飛鳥の庭園: 石神遺跡の方形池、酒船石遺跡の亀形石造品周辺遺構、飛鳥京跡苑池など。幾何学的な平面形の池・石積み護岸・石造物の3要素で構成される。百済の影響か、これは後の時代には続かない。

・平城京の庭園: 宮跡庭園、東院庭園、長屋王邸、阿弥陀浄土院など。池は、平面形が曲線で構成される、岸の意匠には州浜を採用、自然石による石組みなどの変化が起きる。唐の影響か、しかし独自性を持つ。これらの変化は平安時代の庭園に通じる。

※古墳時代の祭祀遺構の石敷きなどは平安時代の州浜に極めて近い。しかし飛鳥時代の庭園は、百済系の新たな技術で作られる。平城京では更に変化を起し、平安京の庭園につながる。

### 3. 平安時代前期(9世紀代)の庭園遺構

平安時代前期の著名な庭園としては、神泉苑(左京三条二坊九～十六町)や嵯峨院(大覚寺)の大沢池などがある。神泉苑は池の一部が現在も残り、小規模な発掘調査が数カ所行われているが、平安時代の状況は未だよく分からない。大沢池(図10)では、名古屋の滝跡から大沢池の北岸付近までの発掘調査が行われており、長さ20m以上・幅約6m・深さ約1.5mの曲線を描く巨大な遣水が検出されており、水の流れが庭園の重要な要素であったことが分かる。このような大きな水

の流れは、平安京内の左京九条三坊十町(図11)の調査でも確認されており、古墳時代の城之越遺跡の遺構にも通じるものである。日本の庭園の底流をなすものといえる。なお、滝組は中世のものであり、池が現在の規模になったのも中世以降であることが明らかになっている。

平安京内で前期の庭園遺構は、10例以上が確認されている。前期の中でも9世紀前半の検出例は少なく、9世紀の後半になると増加していく。

【9世紀前半の主な庭園遺構】冷然院(左京二条二坊三～六町、嵯峨天皇離宮)・左京二条二坊九町(賀陽親王邸カ)・左京四条一坊一町の庭園遺構がある。いずれも池を中心としており、深さは30～40cmと浅い。

・冷然院(図12～14): 池は、南北長が約50mあり、岸辺には景石や州浜で意匠される。特に滝の部分には多数の石が配されており、荒磯風の景観を呈する。池は平安時代前期から中期にかけて使用され、修復や作り変えが確認されている。

・左京二条二坊九・十町(賀陽親王邸): 九町の西部で池が検出されており、州浜は拳大の石を用い、幅は5m以上もある。なお池は南側の十町側まで続く。

・左京四条一坊一町(図17): 池は、南北2つの池に分かれる。北池は更に堤状の遺構で東西に分割されている。これらの3つの池にはそれぞれ州浜があるが、石の大きさや石の下層の粘土層の有無など施工法が異なっている。南池の東岸は州浜と北池からの水の沈殿槽を伴う導水施設があり、同種の施設には平城京の宮跡庭園で石組みのものがある。確認されている南池の東西幅は38m、北池と南池の距離は40mほどあり、池の配置から考えると一町内での池の占める範囲は大きい。なお、池からは「朱雀院灰日記□□(承和カ)十一年五月十三日始」と記された題箋が出土している。この地は、朱雀院とは朱雀大路を挟んで東側に位置するが、それと関連する公的施設が存在した可能性が高い。

【9世紀後半の主な庭園遺構】この時期、庭園の検出例は増加するがここでは全体の様相が明らかとなっている右京三条二坊十六町(斎宮邸)と左京三条一坊六町(藤原良相邸・西三条第)を紹介する。

・右京三条二坊十六町(斎宮邸、図18・19): 「斎宮」が居住した邸宅であることが出土した墨書土器から判明している。池は、十六町の北西部に東西15m、南北40mの池1とその南西部に池2がある。池1の北端と池中央の底には泉があり取水源となっている。池1と池2は溝でつながっており、泉の湧水は池1を満たし、さらに池2に流れる。池の水は留まることなく流れを持っていたことになる。池1の岸には州浜が施されるが、池西岸の北と南では使用する石の大きさが異なっており、北が拳大の石を用いるのに対し、南側は細かい砂礫でより穏やかな印象を与える。池1の周辺には建物が配置されるが、規模に差がなく主殿は不明である。

・左京三条一坊六町(藤原良相邸・西三条第、図20): 出土した墨書土器などから、右大臣藤原良相の邸宅の西三条第(別名: 百花亭)であることが明らかとなっている。池は、東西2つの池が存在したことが明らかとなっている。東池は東西約15m、南北約27mで、州浜は西岸にのみ施される。池の南岸からは堤状の高まりが池中央まで延び、先端には島が作られている。西池は東西約40m以上、南北約25m以上で、州浜は東西と北岸の3ヶ所に施される。2つの池は、溝によってつながっている。東池と西池を比較すると、規模が西池の方が大きく、州浜も丁寧に施工されている。西池が主殿に面する表向きの池で、東池は奥向きの池であったと考えられる。池の埋土を分析したところ、ハス・ヒシ・マツ・ウメ・モモ・サクラなどの種子や花粉が検出されている。邸宅の別称の通り、邸内は花々で飾られていたことが窺える。

#### 4. 平安時代中期の庭園（10・11世紀）

平安時代中期は、寝殿造が完成する時期といわれているが、残念ながら庭園と建物がセットで確認されている調査例は未だない。ここでは、撰関家の代表的な邸宅である高陽院と堀河院の調査事例から庭園の姿をみてみたい。

・左京二条二坊九・十・十五・十六町（高陽院、図15・16）：藤原頼通の邸宅で、後冷泉・後三条・白河・堀川・鳥羽天皇が里内裏にも使用した。京内の貴族邸宅で4町規模をもつのは高陽院だけである。調査は8回行われており、池はそれぞれの町で確認されている。池の全容はいまだ不明であるが、規模は南北140m以上・東西35m以上と大規模で、池の平面形は変化に富んでいる。池の北と南では、汀線や池底が0.5～0.6m北側が高く、2つの池に分かれていたと考えられる。汀の意匠は州浜である。汀はいずれの調査地点でも改修を行っていることが確認されている。建物遺構は1ヶ所でしか確認されていないが、礎石は大阪府泉南地方の海辺で採取された石で、景観を意識していることが窺える。

・左京三条二坊九・十町（堀河院、図21）：藤原基経が邸宅を造営したことに始まり、藤原兼通が改修を行う。白河・堀川・鳥羽天皇が里内裏にも使用した。寝殿が存在したと思われる九町、それから十町でも池を確認している。九町の池は東西約33m・南北15m以上ある。汀のラインは単調で、勾配は緩やかである。州浜は一部にしか認められなかった。池の北東部に落差1mほどの滝石組みが確認されている。遺水は池の北側、北東から南西に流れ池に流れ込む。十町では、2つの池が確認されている（池1570・1810）。池1570の汀ラインは複雑で一部に州浜が認められた。九町の池と連続する可能性が指摘されている。池1810は、平面形は方形で汀は急勾配である。寝殿のある九町と十町の池の違いは、藤原良相邸の東・西池の相違と通じるものがある。

#### 5. まとめ

平安京の中で、池を中心とした庭園の調査例は、平城京や長岡京よりも多い。これは平安京が、地形的に複合扇状地に立地しており湧水が得やすく、池が作り易い地理条件にあることも一つの要因と思われる。9世紀の庭園を伴う邸宅遺跡を見ると、寝殿・左右の対屋・寝殿の前面に広がる池を中心とした庭園というような、典型的な寝殿造を見ることはできない。これは小規模な調査が多いことにも因ると思われるが、邸宅中枢部がほぼ明らかとなっている9世紀後半の齋宮邸でも同様である。

ただし、一部その要素を見出すことはできる。『年中行事絵巻』の法住寺殿では、寝殿と池の間に「南庭」があり、儀式のステージとなっており、庭の原義である広場が寝殿造の庭園の中にあることが分かる。発掘調査でもこのような空閑地を確認することができる。齋宮邸の池の東側の建物1との間には約20mの空間がある。この建物1には細長い廊を備えており、この建物1には多数の人が入ることのできる建物であり、齋宮邸の中で池に面して行われる儀式に使用される建物であったと考えられる。建物と池との間の空間地の例は、他にも右京六条一坊十三町でもみることができる。平安時代後期に編まれたとされる日本最古の作庭書である『作庭記』には、寝殿と池との間は7～8丈(21～24m)が必要と記されており、齋宮邸や右京六条一坊十三町の空閑地の広さに合致する。さらに言えばこの空閑地の広さは、長岡京左京二条二坊十町や平安時代初期の平安京右京一条三坊九町の主殿前の空閑地の広さとも共通する。これらの邸宅では庭園と邸宅はセットになっていないが、儀式のための広場は必要であったことが分かる。平安時代前期から中期に至る中で、池を中心とした庭園が貴族住宅に普及していく中で、平安時代中期に南面する主殿と庭園がセットとなって寝殿造が完成していくと考えられる。

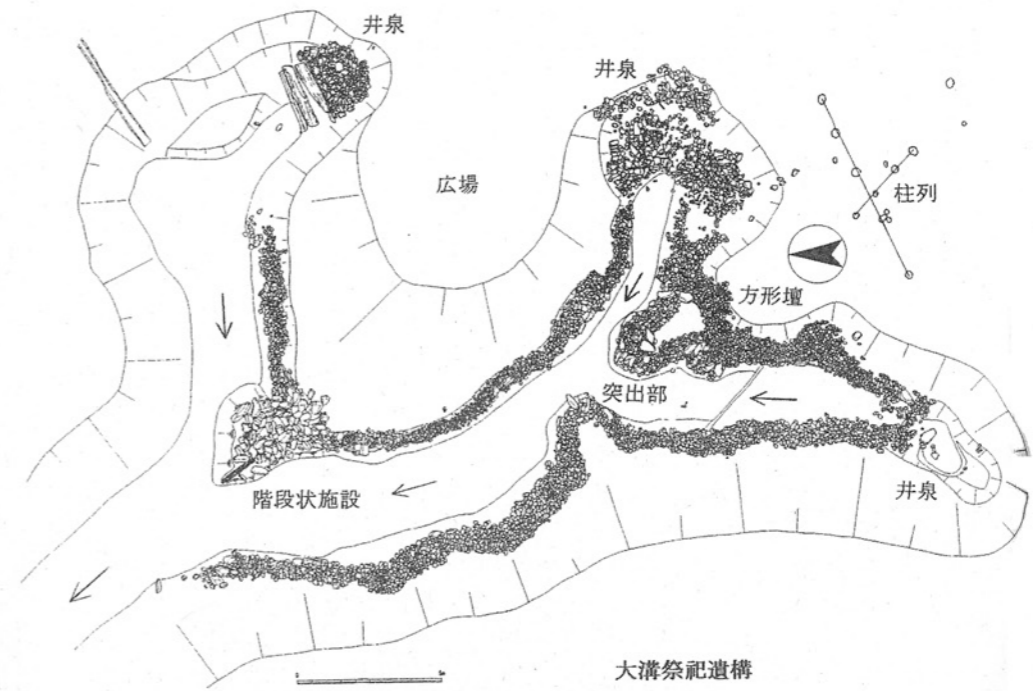


図1 城之越遺跡(三重県伊賀市)



図2 石神遺跡の方形池

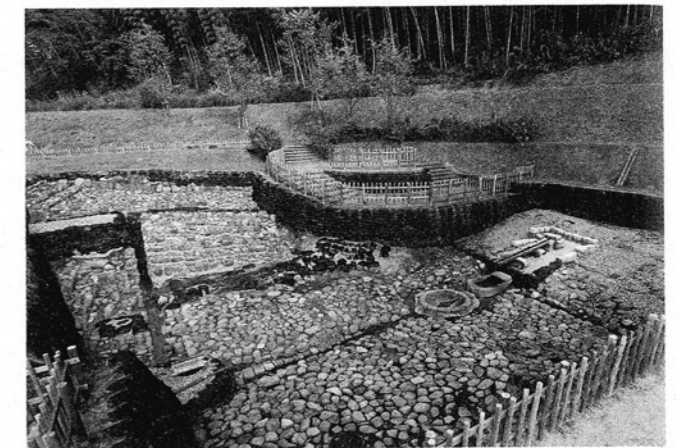


図3 酒船石遺跡の亀形石造品周辺遺構



図4 飛鳥池遺跡の方形池



図5 飛鳥京跡苑池

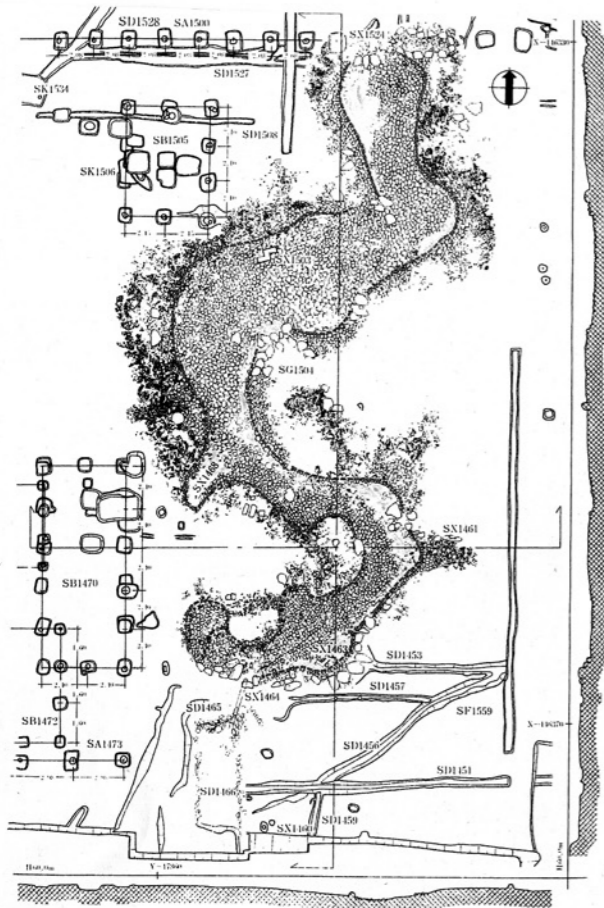


図6 平城京宮跡庭園平面図



図7 平城京宮跡庭園写真



図8 平城宮東院庭園

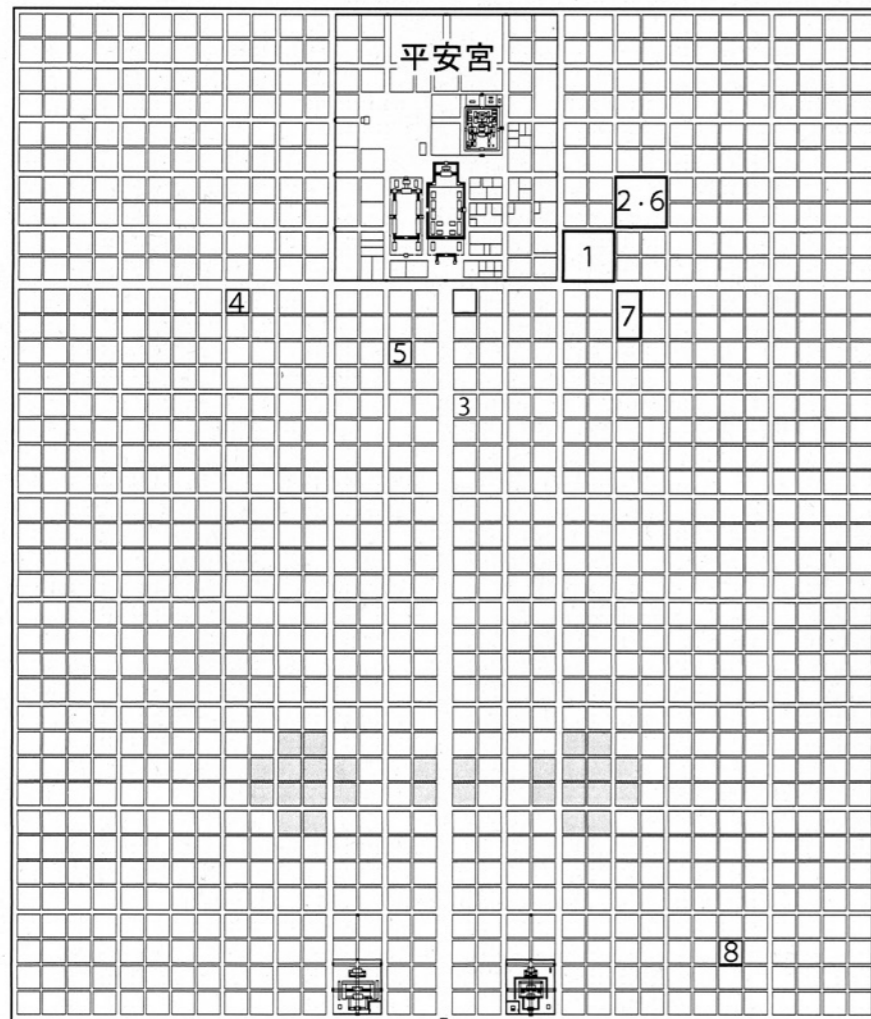
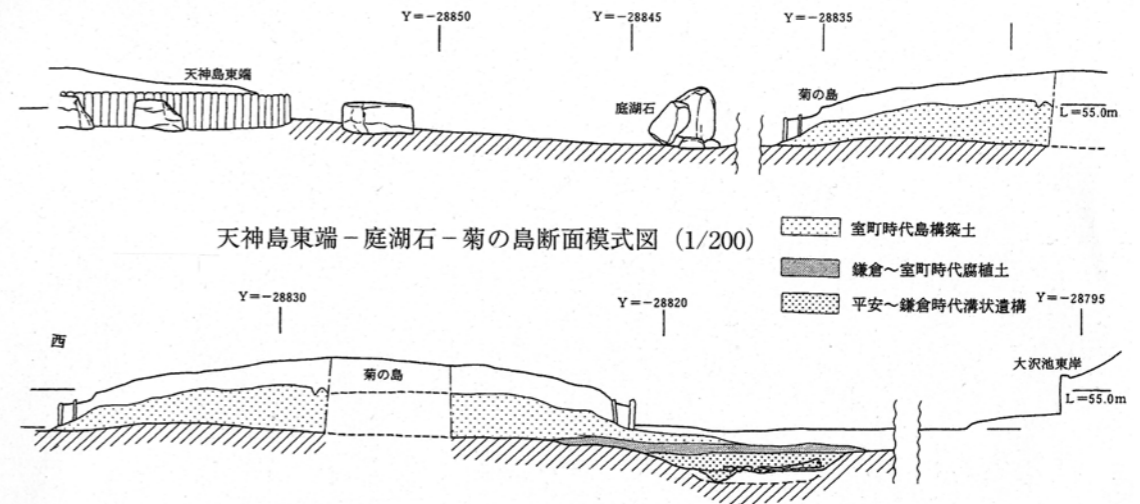
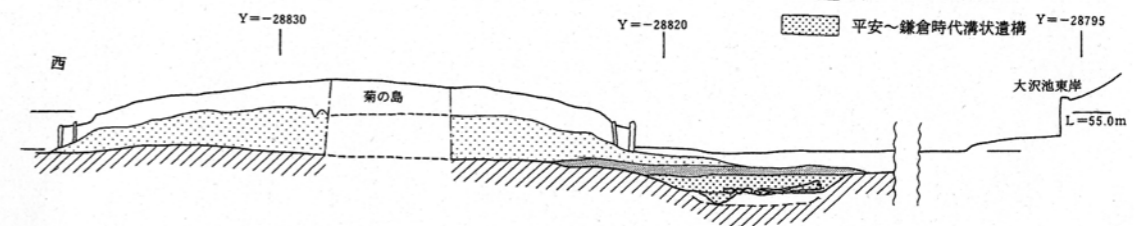


図9 平安京主要庭園遺跡分布図

1. 冷泉院
2. 左京二条二坊九・十町(賀親王邸)
3. 左京四条一坊一町
4. 右京三条二坊十六町(齋宮邸)
5. 右京三条一坊六町(藤原良相邸)
6. 左京二条二坊九・十・十五・十六町(賀親王邸)
7. 左京三条二坊九・十町(堀河院)
8. 左京九条三坊十町



天神島東端-庭湖石-菊の島断面模式図 (1/200)



菊の島-大沢池断面模式図 (1/200)

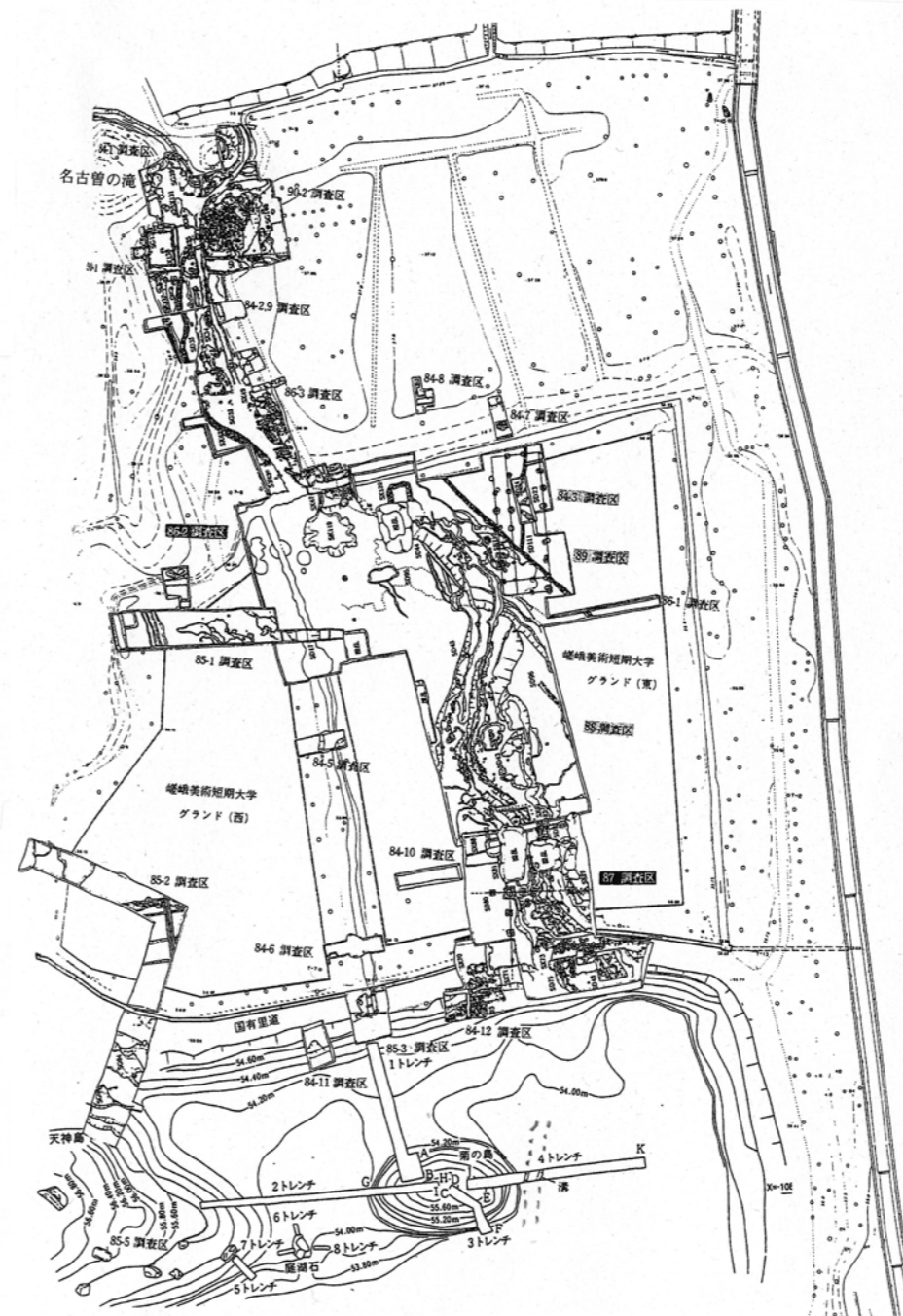


図10 大沢池庭園平面図

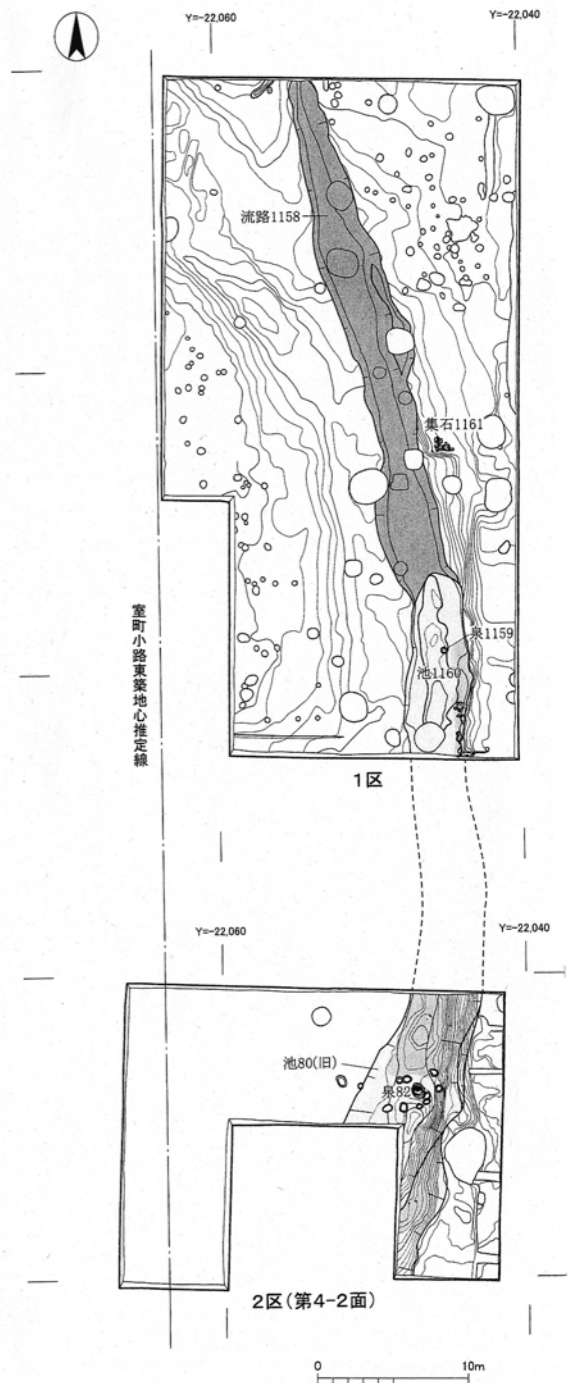


図11 平安京左京九条三坊十町

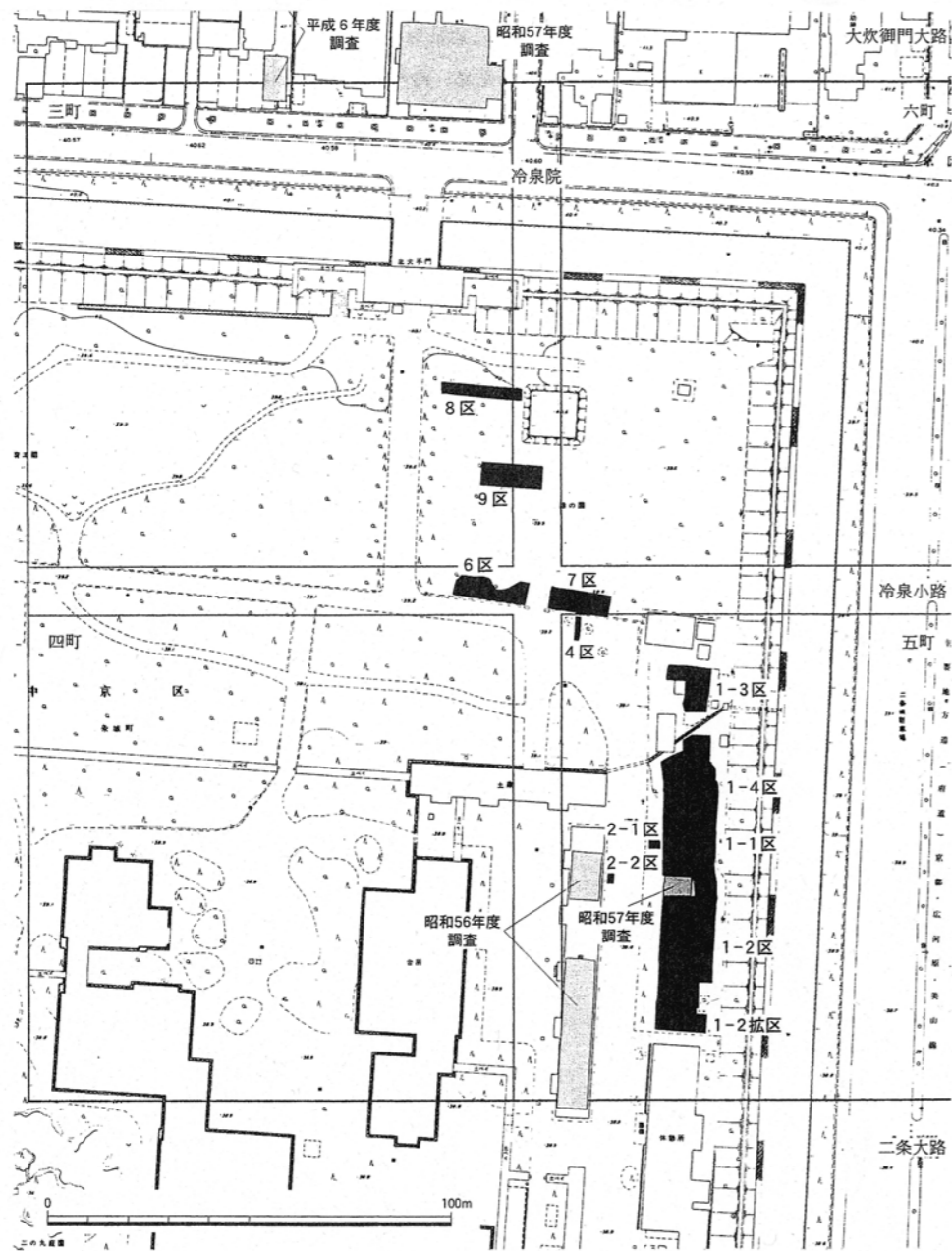


図12 冷泉院調査区配置図(左京二条二坊三~六町)

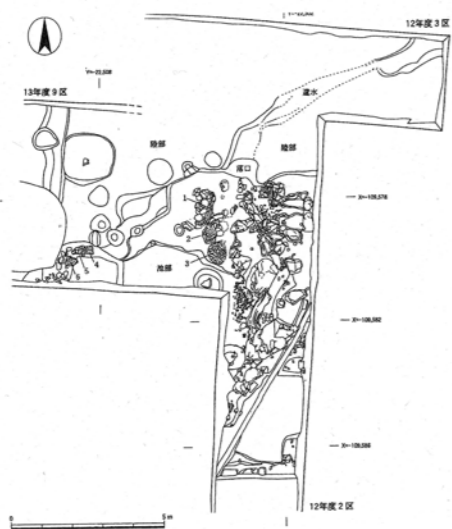


図13 1-4区平面図



図14 1-4区石組み写真

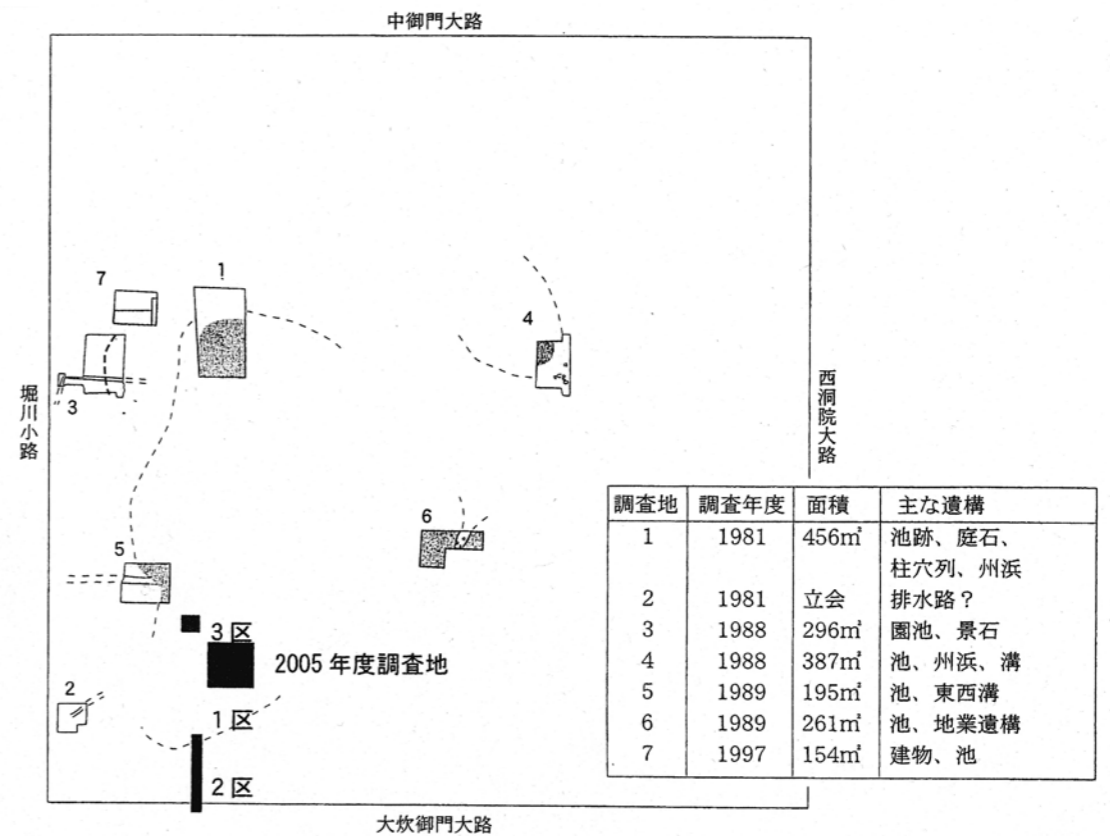


図15 高陽院調査区配置図(左京二条二坊九・十・十五・十六町)  
(平安時代中期)



図16 高陽院調査3遺構平面図  
(平安時代前期)

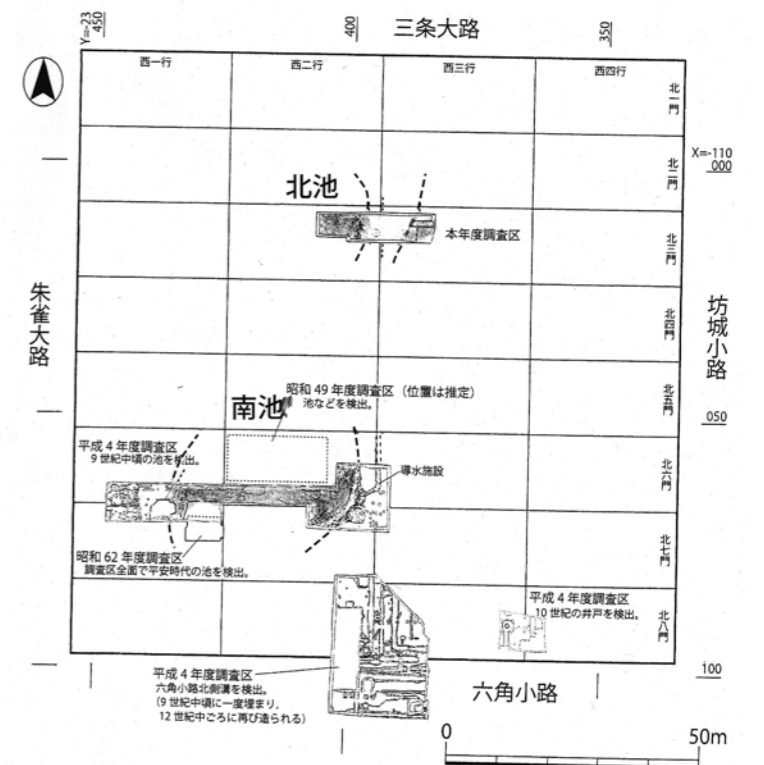


図17 左京四条一坊一町遺構平面図

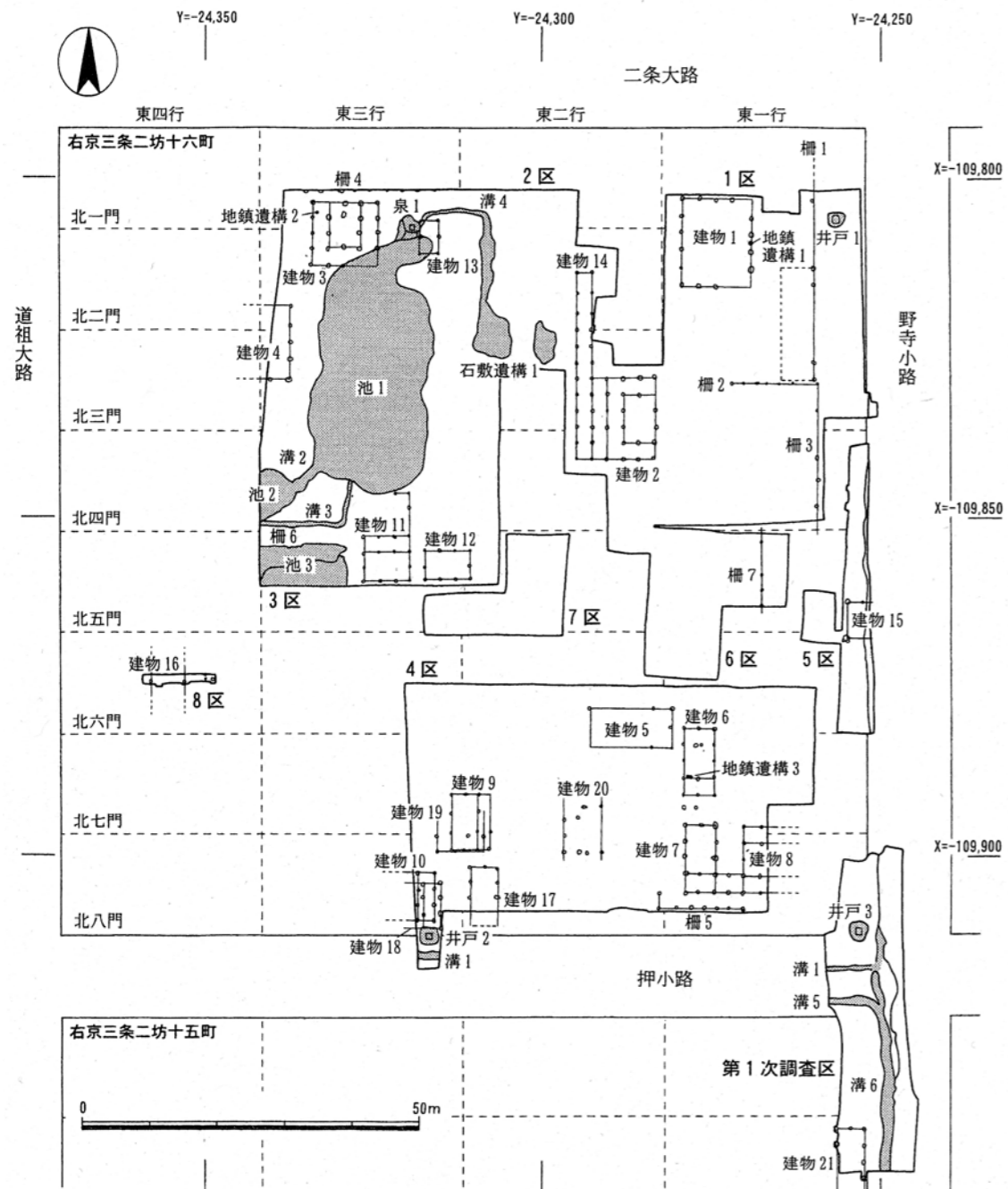


図18 右京三条二坊十六町(斎宮邸)遺構平面図

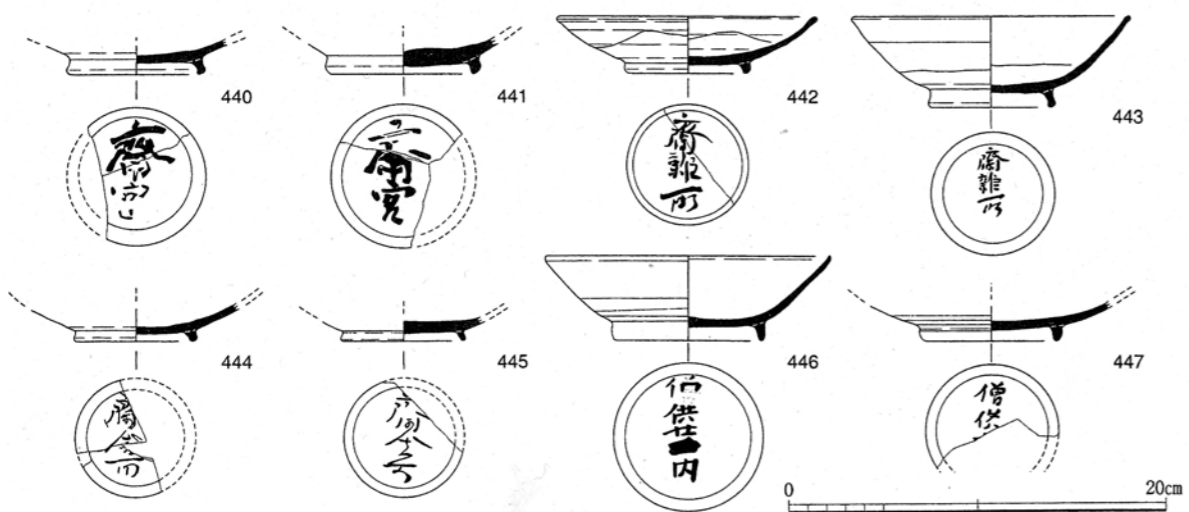


図19 右京三条二坊十六町出土墨書土器

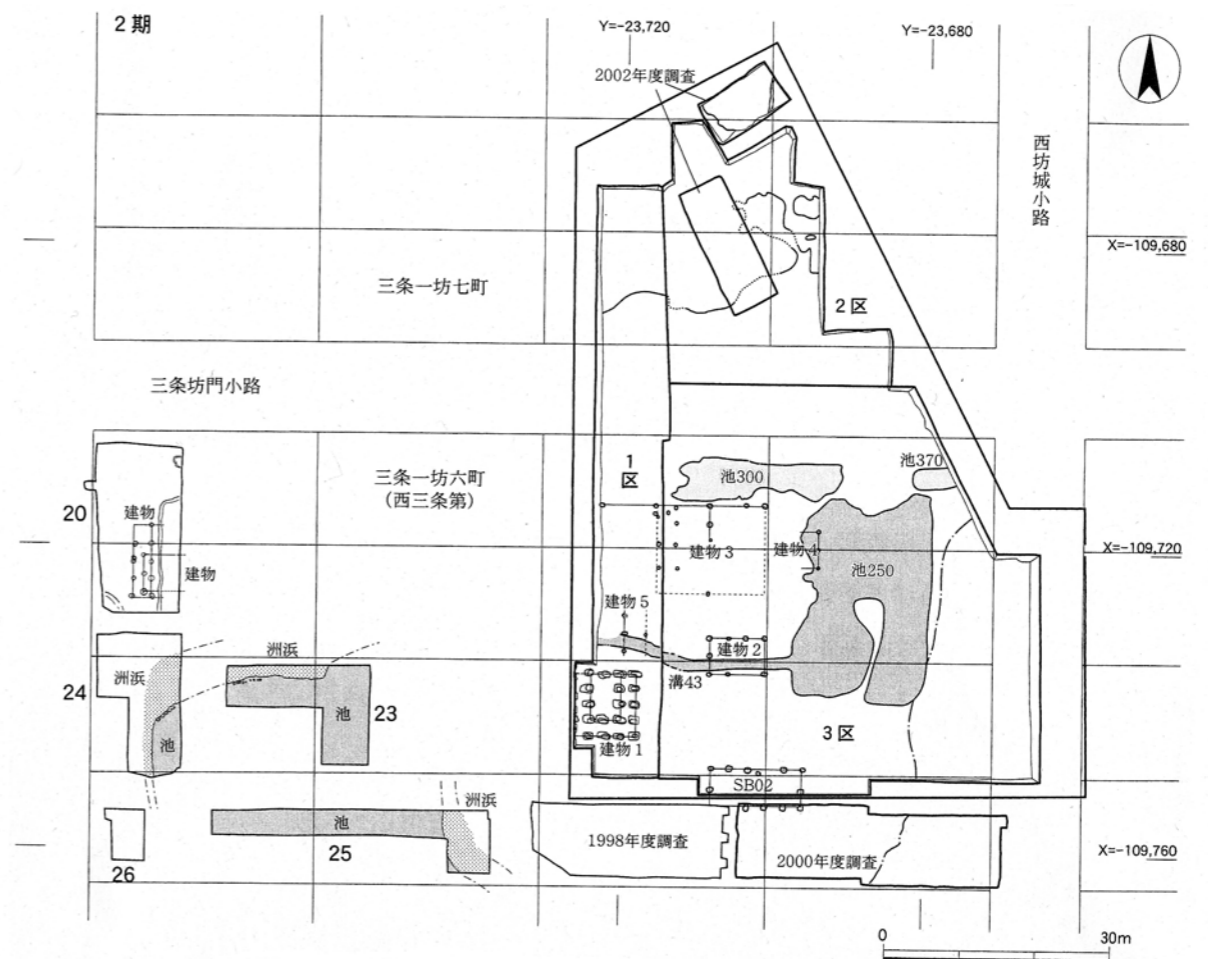


図20 左京三条一坊六町(藤原良相邸・西三条第)遺構平面図

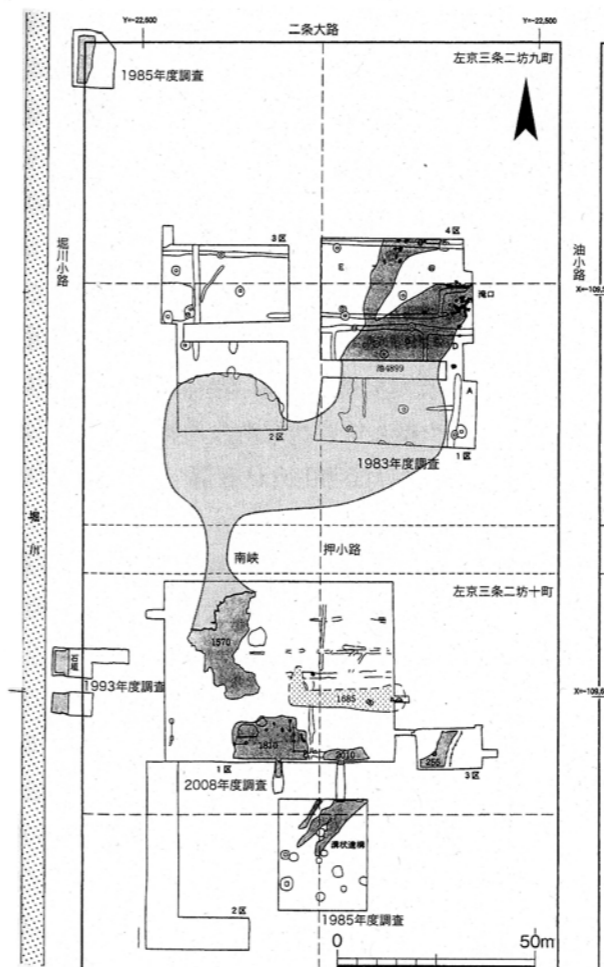


図21 堀川院池復元図(鈴木久男氏による)

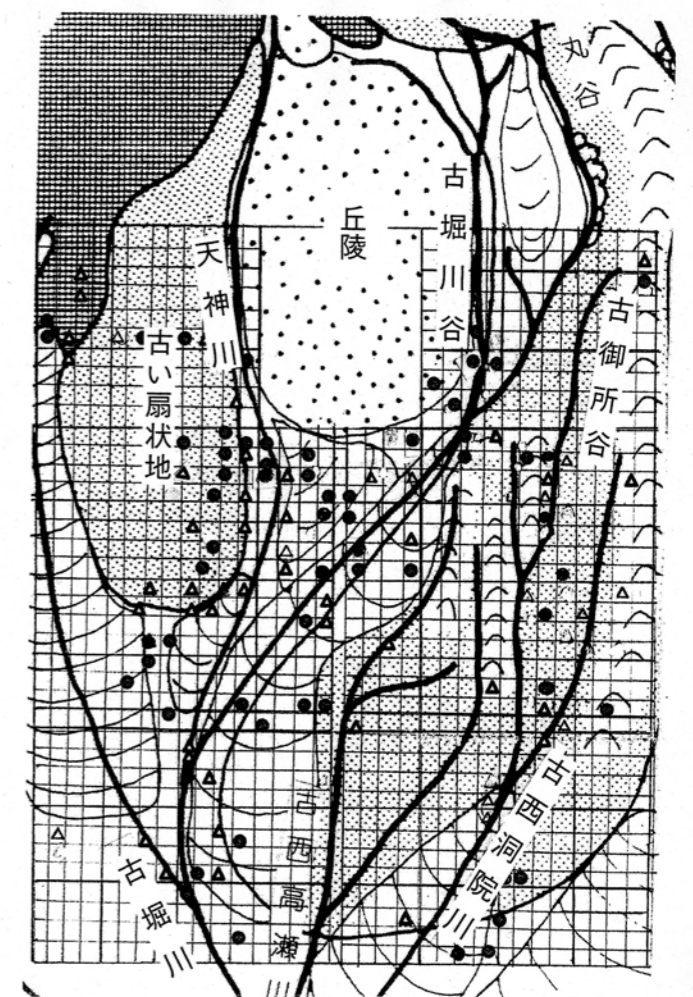


図22 平安京造宮前の地質と河川と園地(尼崎博正氏による)